



田沢下組から栗生神社にいたる風景

黒保根町上田沢の下組地区は、国道 122 号線沿いの水沼交差点から県道 257 号根利八木原大間々線に入り、田沢川に架かる間々下橋周辺に位置する小集落。古くより上田沢村は田沢を下組とし、涌丸を上組として通俗的には区分されていた。田沢地区は山林が多く、近世は炭焼きなどの林業が主流であり、その後「マンガン鉱」の採掘が主要産業になると地元民の多くが採鉱に従事し、昭和 40 年代半ばまで隆盛を極めた。養蚕業も盛んであったため、現在でも大型養蚕農家の形態が多く残り、当時の面影を伝えている。

田沢下組を入口にして栗生山に向かい 3 キロほど進んだ場所に建つのが上田沢地区の鎮守社「栗生神社」である。本社の草創は慶雲 4 年（707）と伝えられるが、南朝の忠臣として最後まで後醍醐天皇に仕えた新田義貞の四天王の一人栗生左衛門頼方公が祀られている。本殿は寛政 2 年（1790）に造営されたもので全体に華麗な彫刻が施されている。一間の胴嵌めは中国の故事を題材とし、三方を囲み、二枚の脇障子は両面透し彫りである。彫物は“上州の左甚五郎”と称された稀代の彫物師関口文治郎が手掛けたもの。文治郎は享保 16 年（1731）、上田沢村沢入に生まれ、少年時代に花輪村に住む石原吟八郎の門人となり、国宝妻沼聖天宮本殿の制作に当たって師匠を手伝った。独立した後は、在郷の彫工育成に努め、弟子たちとともに多くの社寺に名作を遺すことになるが、上田沢村に彫物師集団を創設したことは大きな偉業であったと言える。

境内に立つ大杉は、大同 2 年（807）の植樹と口伝されており、樹齢約 1200 年の大神木は、平成 9 年（1997）に県の天然記念物に指定されている。



所在地 桐生市黒保根町上田沢下組
代表者 小林 善紀